

## 「陰」のNo2張成沢ちゃんそんてくの失脚は青天の霹靂

—北朝鮮は、一瞬にして1950年代（独裁時代）に戻ったようだ—

2013年12月12日

西村金一

### 1. 張成沢への権力の集中と失脚の動き

北朝鮮は12月8日、「陰」のNo2であった張成沢（党行政部長・国防委員会副委員長）とその勢力の全役職の解任と党除名を決定した。北朝鮮の指導体制に挑む反党、反革命分子と見なし、更に「不正腐敗と不適切な女性関係、麻薬・賭博を行った」ことまででっち上げた。翌日には、張氏が人民保安員（警察）の二人の男に議場から連れ出される映像が朝鮮中央通信TVで流された。裁判の後すぐに処刑された。世界の中で、歴史の流れに逆行している感覚を受けるただ一つの国だ。

政権内部で権力争いが起こっている兆候はあったが、まさか、張氏が失脚するとは全く予想していなかった。理由は次の5点だ。①張氏は金正日キム・ジョンイル総書記の妹である金敬姫の婿であり、金正恩キム・ジョンウン第1書記の叔父にあたる。②張氏は過去に2度失脚したが復権している。交通事故で殺害されそうになったにもかかわらず、2007年には秘密警察である国家安全保衛部を指導する党の行政部長、2010年には国防副委員長に就任した。当時李英鎬リ・ヨンホ軍総参謀長（軍のNo1で次帥）とともに軍・秘密警察・党の実権を掌握しつつあった。③張氏が金総書記に金正恩氏を後継者にするように働きかけ、妻の金敬姫とともにその後見人となっていた。④2度の失脚から復活したことで、目立ちすぎて金総書記の警戒心を刺激しないように、2010年金正恩氏が正式に記念写真に収まった党幹部の集合写真でも前面に出ず、背後で睨みを効かせるのみだった。⑤張氏は金独裁体制を維持する中で、中国との関係を保ち、経済改革を進める一方、秘密警察を掌握し、反目する人物（柳敬リュウ・ギョン国家安全保衛部副部長・朴正淳パク・ジョンスン党組織指導部第1副部長など）の排除にも当たっていた。

張氏の失脚そして処刑は、政権内部の不可解な異常事態である。

2008年頃から、張氏と同時に実権を握りつつあったのが李軍総参謀長であった。李軍総参謀長は、党の集合写真撮影の時に金総書記と金正恩氏の間に着席した。また、2011年の軍事パレードの観閲台では金正恩氏と金総書記が腰を屈めてひそひそ話をしていた時に、金正恩氏に後ろから右肘をのせていた。さらに、金総書記の葬列では金正恩氏の左隣（ほぼ同列の立場）で行進するなど、張氏と異なり、自分が実質No1であるような不遜な態度を取っていた。

張氏は、自分の右腕である崔竜海チェ・リョンヘを次帥に昇任させ、軍のNo1である軍総政治局長（軍を党の立場から監視する）、党中央委員会政治局の常務委員（党のトップ4の一人）、中央軍事委員会副委員長などに押し上げた。そして、その崔次帥の力を利用して、自分がやられる前（2012年7月）に軍のトップで党のNo2になった李総参謀長を失脚させた。それ以降、北朝鮮の実権を握ったのは張氏であったのだ。

実権を握った張氏は、党の実務を担当する書記局の書記に自分と繋がりがある者を抜擢した。陰の部分ばかりでなく、党の実務責任者の大部分は張氏の関係者が占め、党の実務を掌握していた。

だが、張氏には疑いを持たれる負の部分もあった。それは、長男金正男の母成恵琳ソン・ヘムリンの口利きがあって復権できたと言われていたことや、一時は金正男を後継者とするよう働きかけたこともあり、現在も金正男との関係が途絶えていないとの情報があったことだ。権力が張氏に集中してきたことと合わせて、金正恩氏から不信感を持たれたと思われる。

## 2. 陰で実力を有していた張成沢がなぜ失脚したのか。どのような対立構図があったのか。

張成沢が失脚に至る権力争いを象徴的な次の三つにまとめて分析した。

その一つは、張氏と崔次帥との権力闘争である。

崔次帥は、張氏の右腕として引き上げられ、表舞台で活躍し始めた。そして、軍を統制・監視する軍総政治局長の立場で実権を握り始めた。陰の部分で秘密警察を掌握した張氏と表舞台で軍を掌握した権力闘争の結果、秘密警察が張氏から離れ、その支えがなくなり、崔次帥に失脚させられた。

二つ目として、張氏と軍強行派の対立である。

張氏によって、李軍総参謀長が失脚し、軍の利権は党に返還させられた。そのため軍の内部に不満が生じ、強行的な軍部と張氏との対立があった。

三つ目として、権力を完全に掌握した金第1書記が、やられるまえにやる論理で排除した。つまり、実権を持ち始めた張氏が完全に実権を握る前に排除した。やられるまえにやるという論理は、金日成主席が過去用いた手法である。

また、張氏は中国との太いパイプがあった。その中国は、金第1書記の政敵となる長男の金正男を保護している。北朝鮮が権力争いなどによって混乱した場合には、中国はいつでも金正男を後押しして北朝鮮を保護国にしてしまう意図が垣間見られた。その場合に協力するのが張氏であるとの疑惑も持たれていた。

以上のような権力闘争の中で、金第1書記が権力を完全に掌握して、実際に自分で決断し、党・軍・秘密警察などを動かして実行したのかというと大きな疑問がある。筆者は、軍のNo1で党のトップ4にもなった崔次帥が、党や軍の長老、さらには、軍の利権を奪った張氏への不満を有する軍の支持を得て進言し、金第1書記が決定したものとする。張氏の妻である金敬妃キム・ギョンヒも従わざるをえなかったのは、張氏に多くの罪状を突きつけられてしまったからだ。形式的に権力が集中しているとはいえ、三十数才の金第1書記に、国の改革を進め、これまで親戚関係にあった人物を根こそぎ交代させることは不可能である。その背後にこのシナリオを仕組んで、関係組織や党の重要人物をまとめた人物がいる。それが崔次帥と見るべきである。

## 3. 政権内部で今何が起きているのか、力関係はどう変化するのか

## 北朝鮮政権内部が大きく揺れ動いている

2012年7月の李軍総参謀長粛清に続き張成沢派の粛清が行われた。李軍総参謀長の粛清もかなりの衝撃であった。これにより、韓国政府などの分析では、党・軍・政府の要職にあったものの約30～40%が交代させられたという。張氏の失脚はそれを上回るに違いない。

党の実務を担当する党書記局員には張成沢派が多く、そのメンバーが処分・粛清されれば、党の実務者がいなくなる。さらに、李軍総参謀長失脚後に抜擢された軍の要人、地方政府関係の実務者が粛清され、軍の掌握、党の行政機能が大きく低下する。また、金第1書記の独裁が進み、党中央委員会や党書記局に、粛清の恐怖、諦めムード・不信感が蔓延する。水面下では、不満を持つ軍と張氏を支持してきた秘密警察の関係が悪化し、国の治安が乱れる。

張氏派を追い落とせば、崔次帥の力は、軍内部だけではなく、党の意志決定機関である中央委員会、党の実務を司る書記局、秘密警察までもに及ぶ。つまり、金第1書記を除けば、表の世界も陰の世界も全て崔次帥が牛耳ったことになる。

ただし、金第1書記にとっては、自分の権力、すなわち金体制を脅かす人物が出てきたことになる。「警戒をしなければならぬ人物が浮上した、ひょっとしたら自分を追い出して実権を握ることもある」と恐れを抱いているであろう。自分以外の者に権力を持たせない、No2の存在を許さないのが独裁者の独裁者たるゆえんである。

今後、崔次帥がどんな動きに出るのか、あるいは失脚させられるのか注目したい点である。

## 4. 金正恩体制は将来安定するのか

生き残るため考え抜いて作り上げた「瀬戸際外交」から思いつきの「危機外交」へ転換注目点は3つある。

一つは、崔次帥が党・政府・軍・秘密警察を抑えきれるかということである。

崔次帥の父、崔賢元<sup>チェ・ヒョソン</sup>人民武力部長の人脈と現在の軍総政治局長の立場で、軍を抑えられるか。軍の利権を党に戻させ、軍高官の降格などから軍人の不満があることは事実である。今まで、張成沢と崔次帥の両輪が抑えていたものを、一人で抑えられるか。それは難しい。結果的に混乱の可能性が極めて高い。

二つ目は、軍と秘密警察の対立が水面下で行われるということである。

本来、軍と秘密警察の関係は、相互監視の機能があって、力のバランスが取れている。これまでの崔次帥の軍と張氏の秘密警察のバランス関係がくずれ、一気にギクシャクする事が考えられる。もし、崔次帥が軍と秘密警察の両方の権力を持った場合には、だれもその暴走を抑えられなくなる。また、金第1書記がこれらの力をコントロールできなければ、金第1書記（金一族）が排除される恐れもでてくる。

三つ目は、独裁国家作りに留まっていて、国家を発展させる長期的な国家戦略がないことである。

金第1書記がこれまでやってきたことは、次のようなことでしかない。

遊園地の視察、妻のファーストレディ扱い、モランボン女性楽団の演奏とロッキーの映像などによる改革・開放的な雰囲気醸成、張氏とともに李総参謀長の粛清、核兵器・弾道ミサイルによる恫喝、平壤でのビル建設、スキー場などの体育施設の建設、実務を司る張氏派の粛清などである。

どうみても長期戦略を策定して国家を運営しているとは思えない。短絡的な思考に基づく瞬間的な思いつき戦略である。そして、自分の権力を安定化するために、現実的で実務能力が高い人物を失脚させた。

能力の高い経験豊富なスタッフを粛清して、中国に不信感を与え、経済的に困窮している北朝鮮経済を立て直すことはできない。北朝鮮政権内部に混乱がおきること、困窮している経済がさらに悪化するのには目に見えている。外交では、思いつきの「危機外交」を展開するであろう。

## 5. 日本には影響がないのか

北朝鮮は、米本土まで届くミサイルの完成まで、あと一步、あと数年というところまで来てしまった。核兵器も小型化し、ミサイルに搭載できる段階の直前に来ている。

日本にできるのは、韓国や米国とともに北朝鮮の制裁を継続し、北朝鮮政権内部に圧力を強めることだ。中国も北朝鮮のコントロールは難しくなったが、石油を止めさえすれば北朝鮮は必ず動く。

「政権崩壊か、それとも核兵器やミサイルの破棄か」、どちらかを選択するしかない道を進ませる時に来ている。そして、拉致問題も同時に解決させる。

でなければ、金第1書記が核搭載の弾道ミサイルのスイッチを押すという最悪の事態にもなりかねない。